

のんた

23

山口の土地改良

vol.23
Winter 2022

21世紀の食料・環境・ふるさとを考えよう！

●巻頭特集

やまぐちの「農の偉業」探訪⑥

山口市 阿知須ため池群

ため池ネットワークがつなぐもの
水、地域、そして
過去も未来も

●入選作品のご紹介

第22回食料・環境・ふるさと

写真コンテスト

入選おめでとう!!

「ふるさとの田んぼと水」

子ども絵画展2020

●特集Ⅱ

新たな

「土地改良長期計画」について

●まんが

まんがで紹介する

土地改良のお仕事⑤

ため池ネットワークがつなぐもの 水、地域、そして 過去も未来も

取材・文：石井里津子



万年池は、昭和42(1967)年に開設したゴルフ場の一部となった

「山口市・阿知須のため池群」が持つ水ネットワークの全貌を知る人はそう多くはないだろう。垣間見たなら、壮大なスケール感に驚くにちがいない。

山口市内のため池が多いという認識はあまりなかったが、旧阿知須町の山手側では、木々の向こうに、はたまたゴルフ場のなかに豊水の美を湛えながら、いくつものため池が存在していた。山口市阿知須土地改良区が管轄するため池リストには、67個のため池の名が連なる。満水面積約26ヘクタールと最も大きいのが「万年池」。最小のもので1・5アールほど。

「個人所有のため池を入れますと70以上あります」

山口市阿知須土地改良区理事長、中尾晴海さんが言う。そして、この土地改良区のなかに15の水利組合が存在する。池の管理はそれぞれの水利組合が受け持つが、昭和末期からの県営ほ場整備に伴い、用水をパイプライン化したことで、最終的な水利権は阿知須土地改良区にあるという。

航空写真を見ると、ため池群のなかでも圧倒的な存在感を放つ3つの池がある。北から「江畑池」「万年池」「黒谷池」。特筆すべきは、それらが水を補完するネットワークを築き上げていることだ。そのための隧道までわざわざ掘ってあるという。今回は、その知られざる水ネットワークを明かしていく。



山口市・阿知須のため池群と受益地 (山口県土地改良事業団体連合会作成)



山口市阿知須土地改良区の理事長、中尾晴海さん。中尾理事長の「ほい、ほい。ええですか?」といった軽妙な掛け声のおかげで、山中の道もくじけることなく突き進めた

主要な3つの池、 江畑池、万年池、黒谷池

山口湾に面し、阿知須千拓地「きらら浜」のある旧阿知須町エリアが、今回の話の舞台。現在の海岸線から、この地で最も高い青山(標高130・6メートル)までは約8キロメートル。ここ全域の農地が山口市阿知須土地改良区が管理する受益地約360ヘクタールにあたる。西から東へ、山口湾へと流れ出る河川は2本。まるで姉妹のようにほぼ平行して走っている。北側が土路石川、南側が井関川。いずれも2級河川だ。上流にあるため池の水は、これら河川と万年池からの水路に流れ込む。

「万年池が一番の親分です」

中尾理事長がわかりやすく教えてくれた。万年池は、江戸中期の築造で3つの池のなかで最も古い。親分だけに中央に鎮座し、まるで大ナマズが2本の太い髭を伸ばすかのように、両河川とつながり、地域全体に水を行き渡らせている。

まるで古城のような 江畑溜池堰堤

そして、万年池の北側にある江畑池は、昭和初期の築造で一番の若手だ。土路石川に流れ込むほか、万年池との間にある小さな焼野池を中継し、万年池と連なる万年下池からの水路ともつながること、万年池の水不足を補完する。一方、万年池の南側には、明治時代後半に築造された黒谷池がある。こちらも万年池との間にある明石川池と明石川下池からの水路とつながり、万年池が黒谷池の水不足を補完ようになっていく。「ええですか? はい、行きますよ!」中尾理事長の軽妙な掛け声に乗り、案内を受けながら現地を訪ねた。

「江畑溜池堰堤は、下から見ますか?」

上から見ますか? という中尾理事長の問いに、「ぜひ、下から!」とお願ひした。堰堤の下へと向かう管理道は、水路沿いに設けられ、生い茂る木々の奥へと続い



江畑溜池堰堤。玉石コンクリート造重力式灌漑用ダム堰堤。この方式としては国内最古の一つ。管理は万年溜池水利組合

江畑溜池堰堤は、昭和6(1931)年に築造されたもの。コンクリート造重力式としては国内最初期のものが、ここ山口市に現存し現役である。現在も農地約92ヘクタールを潤す。その歴史・文化的価値は高く、平成13(2001)年には国の登録有形文化財となった。

堰堤の表面には花崗岩が張られている。築造から90年以上経つため、堰堤全体がいぶし銀のような風合いを見せ、ヨーロッパの古城の城壁かと思紛うほどだ。堰堤の高さは14・4メートル。その脇についている管理用の急な階段を登り、堰堤の上へ上がった。

木立が、豊潤な水を抱くように湖面の周りを囲む。深い群青色の水は、静けさも相まって幻想的な雰囲気醸し出していた。貯水量45万立方メートル。堰堤の



徳田譲甫翁像。徳田の執念ともいえる偉業への感謝は、彼の銅像建立にも見受けられる。大正15(1926)年に建てられた初代の銅像は、太平洋戦争時に軍事供出されたが、昭和39(1964)年、時の町長らにより陶器の像で鮮やかに再建された

長さは約69メートル。その真ん中に半円形の取水塔が設けられ、古城のような趣をさらに引き立てている。

江畑池の築造は江戸時代からの悲願だった。明治22(1889)年に一度完成したものの、翌年に大決壊。甚大な被害を村落に及ぼしてしまふ。そして、昭和3(1928)年、土質のもろさを克服するため、コンクリート造重力式ダムが県営事業で導入され、ようやく昭和6(1931)年にでき上がる。

完成の背後に、人生を賭けた一人の人物がいる。旧井関村の村長を経て、衆議院議員も務めた徳田譲甫(1855-1931)だ。徳田は、執念ともいえる情熱で2代に渡り、悲願のプロジェクトを完遂させた。自ら旗を振った江畑池が決壊し、その再建に力を尽くしたのだ。彼の国や



万年池のほとりには、万年池の石碑が建つ。碑文には、昭和24(1949)年9月に、黒谷池の水不足を補うため、万年溜池水利組合と黒谷溜池水利組合によって結ばれた協定が刻まれている

県への働きかけがあったことで、全国でも早い時期にこの地にコンクリート造重力式ダムが導入されたといえるだろう。古城のような堰堤は、明治・大正・昭和を生き抜いた戦前のリーダーや技術者たちの強い信念と高き志の結晶だった。

ゴルフ場内の万年池は庭園の如く

江畑池の水は、土路石川へと縦に流れるだけでなく、高低差の少ないなか、横へと水を流し、万年池の水を補完する。山陽本線をくぐるため、隧道を設けたり、道路や川などを乗り越えるため、サイフォンを利用したり、随所に工夫が施されているという。

万年池は阿知須ため池群のなかで最大の規模を持つ。周囲7キロメートル、総



みよしがわ 明石川石碑。万年池と、明石川下池からの水が合流する地点あたり。明石川(井関川の上流)へ向かう水と、黒谷池へに流れる水の分岐の場所に建つ。碑文には、大正7(1918)年12月に締結された条文が刻まれる。毎年8月彼岸から翌年の入梅前日まで、明石川池から黒谷池に補水を約束する内容だ

貯水量101・3万立方メートル。受益地131ヘクタールを潤す。築造時期は元禄年間(1688-1704)という。当時の白松庄屋、林又左衛門によって築かれ、その後、増築拡張が繰り返され、現在に至っている。

ここも決壊の苦い歴史を持つ。嘉永6(1853)年、大規模拡張をした年に堤が大破。だが、安政6(1859)年からの修復工事で、10倍の水面面積となる。その後も明治8(1875)年に拡張工事が行われ、さらに昭和39(1964)年にも改修され、現在の姿となった。

かつての万年池は、地域の憩いの場だったというが、昭和42(1967)年にゴルフ場のなかに組み込まれ、半世紀以上の時が経つ。ゴルフ場内とはいえ、池は、万年溜池水利組合が所有し管理している。



黒谷池は土堰堤。そのため、堰堤幅が広い

万年池を見るために、ゴルフ場に入らせてもらった。整備されたグリーンを横目に進み、整えられた松の木の間を、満々と水を湛える万年池が見える。一気に空が広がったかと思うと、空や雲、周囲の木々を映す、広大な鏡のような水面が目に見え、芝生も木々も手入れが行き届き、池は凜とした姿で横たわっている。日本庭園を思わせる風格だった。

池の畔には、土地改良区が管理する石碑が鎮座していた。昭和24(1949)年に定められた万年溜池水利組合と黒谷溜池水利組合の協定を記した万年池碑文だ。万年池から黒谷池へ水を補う約束が刻まれている。最後、黒谷池とそこへ水を送る隧道に向かった。

黒谷池へ、手掘りの隧道の謎に迫る

黒谷池は昭和46(1971)年72年に改修されており、現在貯水量37万立方メートル。築造の契機は、日露戦争終戦後の戦勝記念だという。明治40(1907)年に県営の耕地整理事業で、田地約60ヘクタールの造成とともに建造された。



万年池からの水を黒谷池へ送るための隧道。その入り口。戦後すぐに山口県立山口農業高等学校の生徒たちが掘ったものであることが今回確認できた

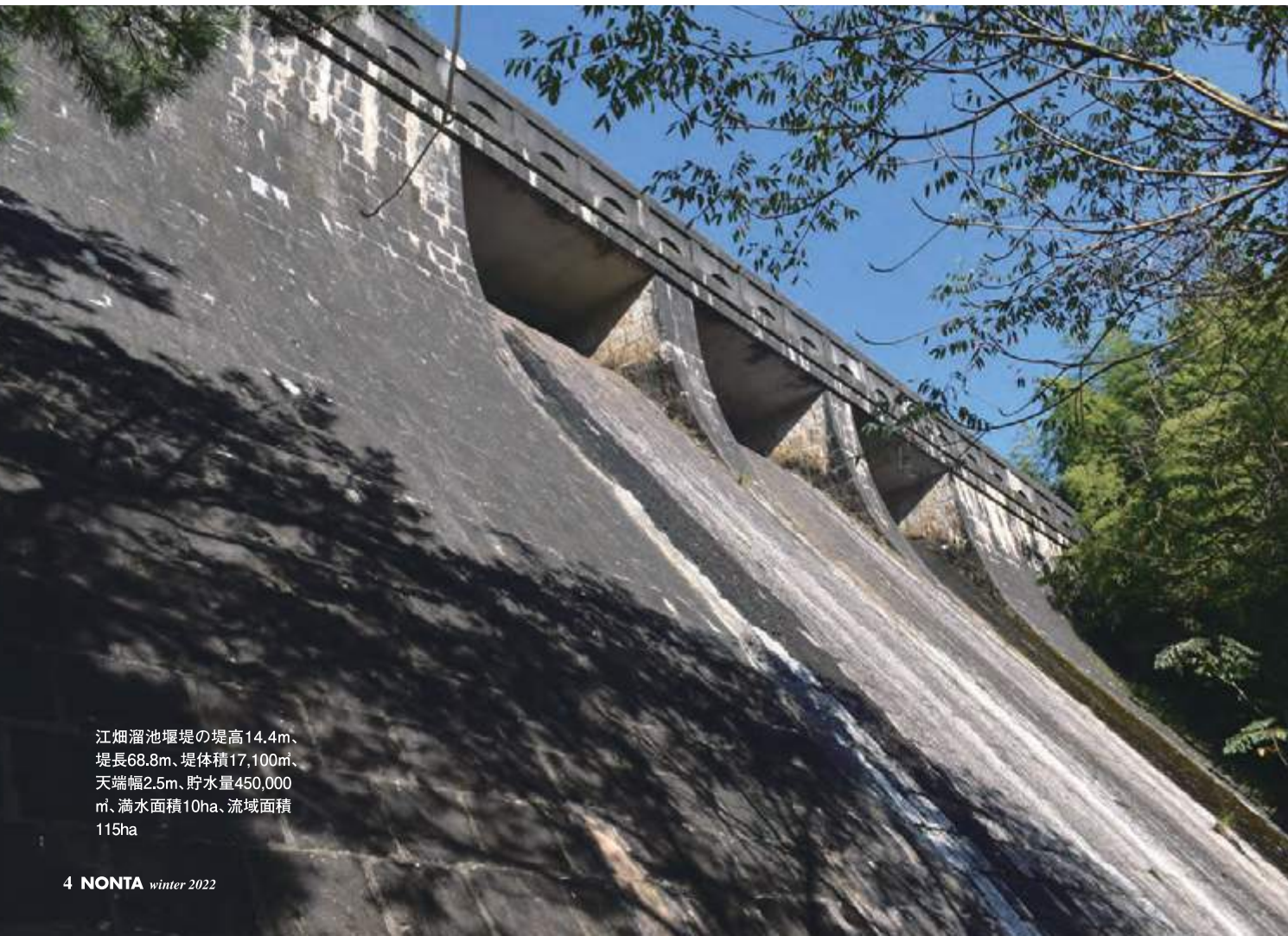
だが、水不足が続く、大正時代に明石川(井関川の上流)の余水を取る水路を掘削。それでも改善されず、太平洋戦争後、万年池からの余水を黒谷池へ流し入れる水路が増設された。今回、ここに設けられた隧道に着目したい。現場に向かう前、中尾理事長はこう話していた。

「この隧道は、農高(山口県立山口農業高等学校)の生徒が掘ったようなんです。どうも戦後の食糧増産の時期に高校生が実習も兼ねて、奉仕活動で掘ったんじゃないかと思うんです。」

ちょうど知り合いのお父さんが掘ったなかの一人らしくて。その人はもう亡くなりましたが、その弟さんから「兄貴が高校生の時、隧道を掘った」という話を聞きましてね。息子さんのほうに今、確認しようとしちよるんですが、電話がつかない。お父さんが何年生まれかわかったら、隧道を掘った時期もわかるでしょうから」話は続いた。

「隧道そばの、引野地区の明栄寺のおばあちゃんから聞いた話もあるんです。85歳くらいの方で、お嫁に来て、住職から戦後、本堂に高校生が大勢寝泊まりして、作業に出ていると聞いたそうなんです」

戦後いつ、誰の手によって掘られたのか。資料による記述は見つけられなかった。ただ、昭和24年(1949)年9月15日、万年溜池水利組合と黒谷溜池水利組合との間に補水の契約が成立し、毎年10月1日から翌年4月末日まで給水を行うようになっていた。つまり、昭和24年9月には通水可能だったことがわかる。



江畑溜池堰堤の堤高14.4m、堤長68.8m、堤体積17,100m³、天端幅2.5m、貯水量450,000m³、満水面積10ha、流域面積115ha

特別に管理道のなかへ入れてもらった。車から降り、山道を木々の枝をかき分け進み、数分後、「ここが隧道の入り口です」との声に足を止める。

コンクリートのU字溝の先に目をやると、岩山の腹にぽっかりと穴が開けられていた。人が一人しゃがめば入れるだろうか。いや、這うように入らねばなるまい。狭さが、人力で掘った感を強める。なかは黒々としていて、何も見えない。

「出口に行きましょうか」再び車に乗り黒谷池に到着し、そこから隧道の出口へ向かった。鬱蒼とした木々のなかへ再び入ってゆく。

「ここです」と中尾理事長が指さす先には、斜面の下、深い溝が掘られており、隧道の穴の手前部分もごっそりと岩山がえぐられていた。その先に一人一人が身をかがんで入れる程度の穴が開いている。岩肌には、明らかに手掘りの痕跡。穴の形も手作りの隧道らしく、いびつだ。隧道の長さは、計ったことはないとのことだったが、地図上で考えても1000〜200メートルはありそうだった。



黒谷池側より向かった隧道の出口。岩盤を手掘りして削ったあとがはっきりわかる。作業しやすいためか、出口周りの空間も掘ってあった

隧道は戦後すぐ、高校生たちの手で

日も陰りはじめ、現場を巡り終えたとき、中尾理事長の携帯電話が鳴った。「ほうですか。やっぱりお父さんが掘った。で、お父さんは何年生まれか、わかりますか」

先に話していた息子さんからかかってきたようだ。電話を切った中尾理事長が興奮気味に振り返った。

「農高の生徒さんたちが掘ったのは間違いないですね。お父さんが、農高の生徒の時に、この隧道を掘ったと話されていたそうです。昭和4(1929)年9月生まれだそうです、その人が高校生ゆうたら、ちょうど戦後すぐでしょう」

高校生といえば、16〜18歳だ。戦中戦後の混乱期、進学進級がスムーズだった保証はないが、昭和4年生まれなら、昭和20年4月〜23年3月の出来事である。少なくとも水利組合の締結がなされた昭和24(1949)年秋には、隧道は貫通していただろう。中尾理事長は続けた。

「戦後の食糧増産のために、若者が汗を流したんですね。当時の高校生の気概を感じます」

追って、山口県立山口農業高等学校の学校史など資料も当たってもらったが、記録は見つからなかった。

10代の若者たちが残した手掘りの隧道。ともすれば忘れられてしまいがちな地域の思いや歩みを生々しく刻みつけている。敗戦下の日本で、皆が食えるように、地域を豊かにしようと、高校生たちが意気込んだ証である。

阿知須ため池群の水ネットワークは、何年も何代もかけて知恵と労力を重ね、ため池をつなぎ、時をつなぎ、人をつなぎ、「今」を創っていた。人口減の今だからこそ、山口市阿知須土地改良区のように地域の物語に耳を傾け、未来へと確かにつなぐ時が来ているように思えた。

■参考文献
『あじすの記憶』阿知須町企画編集・発行 2005
『田園維新』山口県土地改良事業団体連合会発行 2000
『阿知須町史』阿知須町史編さん委員会 1981
『あじす史話』中野真琴著 阿知須町役場発行 1969
『阿知須町史』藤村志明著 1976

土路石川と井関川の流域は、沖積平野が広がり、なだらかな地形が続く。10月上旬、稲穂が黄金色に輝いていた



第22回

食料・環境「水・土・人・暮らし」

ふるさと写真コンテスト

入賞作品のご紹介

一般の部



山口県知事賞

『ウンカに負けない』宇部市
西藤克己(宇部市)

ウンカが発生した田んぼである。農家の了解を得て稲刈りを撮影させて頂いた。コンバイン作業は枯れた稲が巻き付くためたびたび中断した。農家はその都度黙々と絡まった藁を取り除いた。また、田んぼの隅々に残った、枯れなかった稲を手作業で丁寧に刈り取っていた。そこには「ウンカに負けない」という強い意志が感ぜられた。



山口県地球人会議会長賞

『干し柿作り』山口市阿東町徳佐
横川光成(防府市)

軒先に吊るされた、たくさんの干し柿。田舎ならではの懐かしさを感じさせる光景でした。



22nd
Furusato
Photography
Contest

山口県内の農山漁村の良さを再発見していた「水・土・人・暮らし」をテーマに、平成11年度から始まった「食料・環境・ふるさと写真コンテスト」。22回目を迎えた昨年度は、8月から12月にかけて募集を行ない、県下各地から農山漁村の風景や生き物、人々の営み、伝統文化などを撮った655点の作品の応募がありました。すばらしい自然や文化が数多く残る農山漁村は、まさに私たちの、そして生き物たちの心通うかけがえのないやすらぎの地、次世代に残していきたい宝です。入賞作品25点を紹介します。



『天下の奇祭』 下関市長府
谷野 隆 (山陽小野田市)

長府の神社で行われる夏祭りです。長さ20~30mの竹を担ぐ男達が境内を回る勇壮な祭です。



『一寸休憩』 山口市小郡 熊野神社
来栖旬男 (山口市)

山口市指定の無形民俗文化財で神話に基づき16の舞から構成された神楽です。地域の大人に交じて小学生が参加し、いくつかの神楽を舞い、岩戸神楽継承の力になっています。写真は面を被って休憩している子供達です。

一般の部
入選



『秋分の田園』 周南市中須北 棚田
大井幸枝 (萩市)

脱穀をするのに何日も晴天が続きよく乾いたようであちこちと作業をされていました。まだハゼカケが残っており平行構図としてとらえ、手前に機械を操作されている動作の瞬間を頭に入れました。土手のひがん花もアクセントにして縦構図で撮影しました。



『帰路』 周南市
藤井孝子 (周南市)

棚田を作っている人の中には、その地に住まず、通って来る人もいます。そんな人の後姿を追いました。



『トトコのいる里』 山口市仁保下郷
来栖淑子 (山口市)

孫のために作ったというイブキの木のトトコが仁保の里山にあります。見上げた人みんなを笑顔にしています。



『今日も漁場へ』 宇部市 宇部岬漁港
齋藤 暁 (山口市)

寒さが身にしみるこの時期、黙々と網の手入れをする漁師さんの姿がすごく印象的だった。当たり前のように魚を食してきたが、改めて漁師さんの苦勞を考えさせられた。



『秋空に舞う』 周防大島町外入
尾崎ヒサ子 (防府市)

海を望むふじばかまの畑。あさぎまだらが楽しそう？に飛んでいます。



『鵜飼の光芒』 岩国市 錦川
渡邊サダ子 (山口市)

錦帯橋の鵜飼いが今年も行われ光芒の横揺りに挑戦した。想像していたより火が一杯の川になり船頭が映っていた。



『赤と黒の世界』 光市室積
阪本守通 (下松市)

フィッシングパークで夕方、釣人を写しました。夕日の綺麗な場所です。



『憧憬』 山陽小野田市 花の海
金子幸子 (宇部市)

花の海のヒマワリ畑に今年は少し背の低いひまわりが一面にさいっていました。夕焼けが差し込んできましたので、三脚を立て、スローシンクロの撮影を試みました。

第22回

食料・環境「水・土・人・暮らし」
ふるさと写真コンテスト

入賞作品のご紹介



水土里ネット山口会長賞

『麦秋』 防府市西浦
藤田 毅 (防府市)

6月初旬、麦の穂がたわみに実った干拓農地の広い田んぼを、大型農機具で収穫作業が今から始まろうとしているところを撮りました。



山口新聞社賞

『収穫の頃』 下関市秋根新町
黒木丸生 (下関市)

稲刈りの時、コンバインに寄って来るシラサギの様子です。稲に隠れていたバッタ、イナゴが飛び出した時にシラサギが食べにコンバインにやってきます。



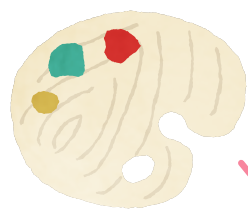
中国新聞防長本社賞

『伝統の四ツ手網白魚漁』 岩国市 錦川
狩山睦江 (岩国市)

今は減ってしまった四ツ手網白魚漁。潮の満ちた時のみ行われている。



22nd
Furusato
Photography
Contest



Congratulations!!

入選おめでとう!!

「ふるさとの田んぼと水」 子ども絵画展2020

主催:全国水土里ネット・都道府県水土里ネット

小学生以下を対象に開催される「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展。2020年の絵画展には、「新発見! ぼくのわたしのふるさと自慢!」のテーマのもと全国から4,883名の応募があり、山口県からは2名の方が入選・入賞され、7名の方が佳作となりました。おめでとうございます!!



入選

「農家の人がささえているよ。」

山口市立宮野小学校4年 堀上紗也佳さん



水土里ネット山口 会長賞

「まもりたい、自然にあいされる用水路」

山口市立宮野小学校5年 岩本乃音さん



佳作

「ぼくの大すきな
トラクター」

山口市立名田島小学校4年
加瀬文真琉さん



佳作

「ねずみさん
を見つけたよ」

周南市立戸田小学校2年
山田怜愛さん



佳作

「みやじまさま」

周南市立戸田小学校2年
高松希杏さん



佳作

「ありがとうの田んぼ」

山口大学教育学部附属山口小学校3年
棕木翔太さん



佳作

「名田島の春の生き物」

山口市立名田島小学校4年 藤山蓮さん



佳作

「みんなでがんばる
田植えの日」

山口市立名田島小学校4年 田中陽葵さん



佳作

「大すき!おいしいやさい
いっぱい名田島」

山口市立名田島小学校1年 長廣真司さん



入賞



『ひがん花が、どこまでも、
さいているよ!』 西円寺の近く
江崎舞桜(山口市・小学3年)

この写真を写した理由は、ひがん花に、いね
がうつってきれいだからです。



『きれいなひがん花』 西円寺の近く
岡本光姫(山口市・小学3年)

赤色のひがん花と青色の空のあいしょう
がよくてきれいでした。



『あ!桜と川!!』 下松市
嶋田菜月(下松市・年々少)

「ママ!桜と川がある!行きたい!」とドラ
イブ中に車を停めて写真を撮りました。



『やっと実ったよ』 校舎内
光永唯菜(防府市・中学3年)

今年の夏、クラスにゴーヤのカーテンをつくりました。緑がいつば
いで涼しく過ごすことができました。毎日みんなで水やりをして、
初めて見つけた小さなゴーヤ。うれしかったです。



『ヒガンバナの道を
さんぽ』 西円寺の近く
村上蒼虎(山口市・小学3年)

ヒガンバナの道はきれいでした。



山口県地球人会議会長賞
『おじいちゃんとぼく』 周南市鹿野
佐々木結愛(周南市・中学2年)

田植えのとき楽しそうにしていたので写真を撮りました。



優秀賞

『私のふるさと』 下関市吉見
植村友美(下関市・中学3年)

この写真に写っている場所は私のふるさと吉見にある
龍王神社という神社です。



『いねかりの様子』 陶小学校のまわり
中野晏隆(山口市・小学3年)

いねが黄色くてきれいだったのでこの写真にしました。
人の生活が感じられると思います。



『ギャー足が
うまっちゃう〜!』 学校の田んぼ
山本理久(柳井市・小学5年)

初めて田んぼに入りました。田んぼのどろの中に足が
うまってしまいました。冷たくて、びっくりしました。



『夏の有帆川』 山陽小野田市
山田健太郎(山陽小野田市・中学2年)

井出は何のためにあるのでしょうか? 田んぼに水を送る
ためでした。



主催/食料・環境・ふるさとを考える山口県地球人会議

山口県・水土里ネット山口

後援/山口新聞社・中国新聞防長本社

※学校名、学年は受賞当時のものです。

新たな

「土地改良長期計画」について

持続的に発展する農業と
多様な人が住み続けられる農村の実現に向けて

わが国では、土地改良法に基づき、5年ごとに「土地改良長期計画」を策定しています。令和3年3月、新たな「土地改良長期計画」（令和3年度～7年度）が策定されました。その背景や内容をご紹介します。

農業・農村をめぐる情勢の変化

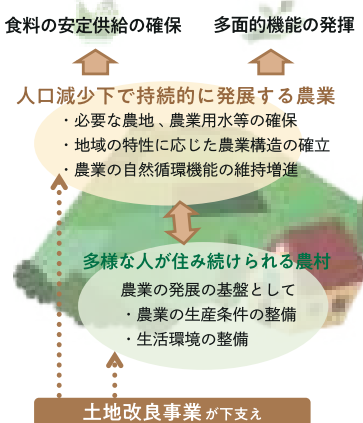
新型コロナウイルス感染症の流行により、世界が大きな社会変化に直面する中、土地改良事業においても、時代を見据え、コロナ時代の「新たな日常」の実現、**SDGs（持続可能な開発目標）**への貢献等の観点が重要となります。農業・農村が目指すべき姿を実現するには、農業・農村を取り巻く情勢の変化を考慮し、土地改良事業を推進していくことが必要です。

※サイバー空間とフィジカル（現実）空間を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会

農業・農村に期待される役割

食料・農業・農村基本法の基本理念として、農業・農村には「食料の安定供給」と「多面的機能の発揮」という2つの役割が期待されています。農業は、食料の安定供給だけでなく、農業が行われることにより発揮される多面的機能を維持する役割を担っています。

農村は、農業生産活動が行われる現場であると同時に、農業者を含む多様な人が日常生活を営む生活基盤でもあります。



「土地改良長期計画」では、食料の安定供給や農業・農村の多面的機能を維持していくため、

- ①人口減少下で持続的に発展する農業
- ②多様な人が住み続けられる農村

を目指す姿とし、それを下支える土地改良事業を推進します。

今回の長期計画の方向性

新しい土地改良長期計画では、計画的かつ効率的に事業を進めていくため、産業政策の視点、地域政策の視点、両政策を支える視点の3つの政策課題を設定、それらを踏まえた5つの政策目標を掲げ、実現を目指しています。

○産業政策の視点

生産基盤の強化による農業の成長産業化

【政策目標1】

担い手への農地の集積・集約化、スマート農業の推進による生産コスト削減を通じた農業競争力の強化

【政策目標2】

高収益作物への転換、産地形成を通じた産地収益力の強化

○地域政策の視点

多様な人が住み続けられる農村の振興

【政策目標3】

所得と雇用機会の確保、農村に人が住み続けるための条件整備、農村を支える新たな動きや活力の創出

○産業政策・地域政策を支える視点

農業・農村の強靱化

【政策目標4】

頻発化・激甚化する災害に対応した排水施設設備・ため池対策や流域治水の取組等による農業・農村の強靱化

【政策目標5】

ICTなどの新技術を活用した農業水利施設の戦略的保安全管理と柔軟な水管理の推進

流域治水とは？

気候変動に伴い、水災害リスクが増大しています。流域治水は、これまで河川管理者が主体となっていた治水対策を、流域全体のあらゆる関係者が協働で行う取組です。農業・農村においては、農業用ダムの事前放流、ため池の活用、排水機場の整備、田んぼダムの取組が注目されています。

田んぼダムとは？

大雨時に河川や水路の急激な水位上昇を抑え、下流域の洪水被害リスクを低減させることを目的に、水田の排水口に流出量を抑制するための、落水量調整装置を設置するなどして、水田の雨水貯留能力を人為的に高める取組です。田んぼダムにより雨水が一時的に水田に貯留されることで、人々の生命や暮らしを守る流域治水の取組として期待されています。





漫画工房 樹本村塾



【まんがで紹介する土地改良のお仕事⑤】

ため池サポートセンターについて

ため池サポートセンターについて、まんがで簡単に紹介します。

のんた Photo Column



【メダカ】

日本の原風景ともいえる田んぼは、かつてたくさんの野生生物の宝庫でした。童謡『めだかの学校』でお馴染みの小さくて可愛いメダカもそのひとつ。古くから日本人に親しまれてきたメダカは、水の流れがほとんどない田んぼや用水路、ため池など、私たちの身近にたくさん生息していました。本来、野生のメダカは、水田の水草に卵を産み付け、孵化した稚魚は水田で育ち、水田の水を抜く際に用水路に流れこみ、そこからため池に移動して冬を越していました。しかし、田んぼの減少や外来生物の侵入、水辺環境の悪化などの影響を受けて、野生のメダカは個体数が激減しており、絶滅が心配されています。

メダカのための環境を守ることは、他の魚や水生生物の保護にもつながります。こうした生き物が生息できる環境を保護したり、人工的に復元したりする活動は、全国各地で行われています。

発行

食料・環境・ふるさとを考える

山口県地球人会議 事務局

〒753-0079 山口県山口市糸米2丁目13番35号 水土里ネット山口 山口県土地改良事業団体連合会内
TEL:083-933-0033 FAX:083-933-0048 URL:<http://www.yamadoren.or.jp/>